



スピードスケート女子500m決勝。日本期待の小平奈緒選手の滑走は、14走目だった。ワールドカップを連勝しているといえども、一発勝負のオリンピック、テレビ画面からも小平選手の緊張感が伝わってきた。記録は36秒94。オリンピック新記録。しかも、低地での女子選手初の36秒台。この時、多くの人が小平選手の金メダルを確信したと思う。

しかし、小平選手は違った。金メダルの予感に心が動いても不思議ではない状況で、小平選手が示した態度が上の写真。オリンピック記録に沸く観衆に、口を真一文字にし、次の15走で走る最大のライバル李相花（イ・サンファ）選手、日本の郷亜里砂選手が、走りに集中できるよう、指先で静寂を求めた。

李選手のプレッシャーも、想像に難くない。500mの世界記録保持者で、バンクーバー・ソチとオリンピック2連覇。そして、地元韓国でのオリンピック開催に、韓国のスーパースターへの金メダルの期待も大きかった。

結果、0秒39差の2位。泣き崩れる李選手に寄り添ったのが小平選手。この光景は何度もテレビで流れた。そこで交わされたやりとりが世界から絶賛された。李選手の抱えた大きなプレッシャーを知る小平選手は、「すごたくさんの重圧の中でよくやったね。私は、サンファをリスペクトしている」と伝えた。

その後、2人で国旗を持つウィニングラン。そこでも地元韓国李選手への配慮からか、観客席に近いアウト側は李選手、小平選手はイン側で併走したのは、偶然ではなく、小平選手の気遣いでもあったと思う。

短いドラマであったが、真のスポーツマンシップとは、思いやりとは…感動し深く考えさせられた場面だった。そこには、誰よりも努力し、ライバルからも学ぼうとする、2人だから知る、長くて深い、そして強い友情があった。



女子パシュートで金メダルを獲得した高木美帆・高木菜那・佐藤綾乃・菊池彩花の4選手。その滑りは、磨きに磨いたチーム力の勝利だった。

最大のライバルは、スピードスケート大国オランダ。個人の記録だけを比べれば、太刀打ちできない。

日本チームは、チーム力で対抗した。そのために、年間300日にも及ぶ合宿を重ねた。空気抵抗を減らすため、一直線の隊列で滑る、他チームの半分の時間・距離で先頭を交代する等など。また、一人ひとりの走力とスタミナ分析から、各選手の先頭を担当するラップ数まで、緻密に計算した。

今季ワールドカップ3戦連続で世界新記録をマークした日本チーム。しかし、ピョンチャンオリンピックでも更なる改善が続いた。予選のラップで1カ所だけ谷があった。4、5週目、疲れがピークの6週目より、0秒13遅かった。そこを、さらに意識して、準決勝・決勝と進んだ。

チームを引っ張った高木美帆選手。オリンピック直前「前回のソチオリンピックでは、出場を逃し、大きな挫折感が…」との意地悪なインタビューに、「挫折とは思っていません。やることをやっていますでしたから。」凄い！やることをやり尽くしたチーム。直後の姉・菜那選手のマススタートの金にもつながった。



女子カーリング、私は準決勝と3位決定戦を、ハラハラドキドキしながら、テレビで観戦した。

前半、リードされ、予選一位の韓国に、「今日は無理かな？」私の勝手な予想を打ちのめし、終盤の粘りで韓国チームを追い込んだ。韓国チームの見事なドロショットに負けはしたが、素晴らしい試合だった。

3位決定戦、1点ずつ取り合う緊迫したゲームが続いた。最終エンド、2点を取りに来たイギリスのショットミスで勝利したが、2点を取りに行かせた日本チームのそれまでの一投一投が見事だった。

カーリングを観ていると、投げるコース、力加減、滑りに応じてスウィーピングと呼ばれるブラシでこすること、刻一刻と変化する氷の把握、そんな緊張が2時間半も及ぶ過酷な競技でもある。味方の失投が、相手の得点にも結びつき、それで、チームが落ち込むのか、カバーし合うのか、チームワークも大きく問われる競技だ。

その中で、日本チームのチームワークをつくっていたのが、「そうだね！」の言葉と共に、笑顔を絶やさなかったこと。休憩時には、チームリーダーの本橋選手が用意したイチゴが、チームをさらに明るくしていた。「笑顔の力」凄い！



校庭の梅も花が咲き、すっかり春らしくなってきました。皆さん、行楽のご予定は？！

私は、昨年家族の一員となったワンコのおかげで、近くて・安くて・とても広い大泉緑地の魅力を知りました。大泉緑地には、上の写真のよのゴリラの像が、季節毎の着せ替えで、笑みを誘ってくれます。

お金もかからない、素晴らしい公園を利用しないと、もったいない！